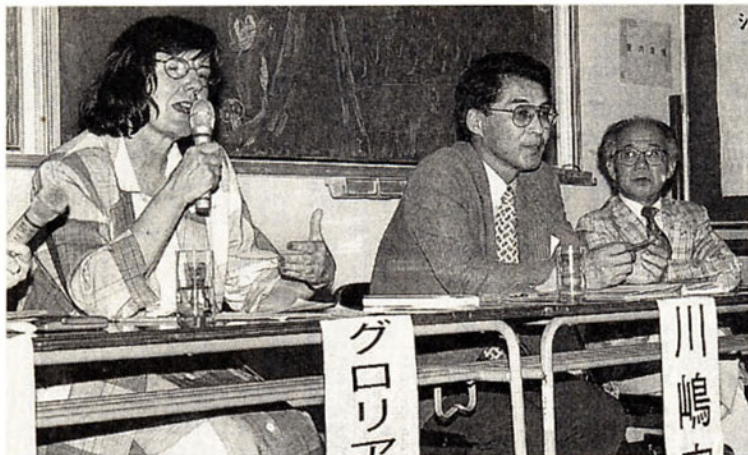


# 「環境教材の開発を」

## 現行のカリキュラムでは限界

日本環境教育学会の第九回大会がこのほど、大阪府柏原市の大阪教育大学で開かれ、環境問題に関心を持つ教師や研究者が全国から集まった。記念シンポジウムでは、現行のカリキュラムの中で環境について教えることの限界もとりざたされ、環境教育を充実させるとともに、教材の開発を急ぐべきとの声が聞かれた。

(袖中陽一)



「環境教育の教材開発が急務」などの意見が出た日本環境教育学会のシンポジウム—大阪府柏原市の大阪教育大学

学会は二日間開かれたが、最後のプログラムではカナダのウィクトリア大学教育学部長、グロリア・スナイヴリーさんが記念講演。スナイヴリーさんは、「環境教育は現状変革に向けての行動を起こすためのものでなくてはならない」と観念だけの環境教育を批判。環境教育の原則を提示した。

①子どもたちに自然環境に直接触れる機会を与える②環境に対して責任ある行動とは何かを考えさせ、実践させる③自然は複雑なシステムだと認識させる④人間の行為の結果がどうなるのか考えさせ⑤自然は美しいという感性や畏敬の念を育てる—など。これらの原則を踏まえた上で環

五年の国際環境教育会議で採択されたベオグラード憲章で環境教育について触れているが、実際には今まで環境教育と呼べるようなものはなかった」と話した上で、「現在は革命といってもいい教育改革の過渡期。現場の先生とわれわれ研究者が協力して教材をつくらせていきましょう。また、優れた環境教育をしている先生は各地にいるが、横のつながりがない。お互いに経験を伝えることが大切」と訴えた。

本自然保護協合理事の金田平さんが参加した。川嶋さんは「一九七

## 参加…実感

### 目的を欠いた自然観察を批判

●日本環境教育学会●

境についての知識を増やし、実践を通して力をつけさせてゆくの、環境教育のあるべき姿と、スナイヴリーさんは説いた。

「ただし、あまりに大きな問題の前では子どもたちはひるんでしまう。また、産業界からの圧力でつぶれてしまうような問題は環境教育にはふさわしくない。自分たちで参加し、実際に少しでも環境がよくなったと実感できるものを教材として選ぶのがいい」として、自分らで川の水質を調査、きれいな川にサケを放流するプログラムなどの例を紹介した。

「昔は水が濁れば水源を見に行ったものだが、今は水道の蛇口をひねれば水が出るなど、生活の中でブラックボックスが多すぎる。ブラックボックスの検証をするような教育が必要では」と話した。

続くシンポジウムでは、「二十一世紀に向けての環境教育」のテーマで議論。スナイヴリーさんのほかに、滋賀大学の環境教育湖沼実習センター長の川嶋宗継さん、日